一般口演

1　中国医学と道教（XII『紅楼夢』から）

吉元昭治

一昨年、当学会で発表した『金瓶梅』についで今回は『紅楼夢』について検討を加えたい。作者は曹雪芹（一七一五―一七六四年？）で、その八十回まで書きおえこの世を去っている（八十回本）。その後、高蘭墅らが修訂、加筆し百二十回とし、乾隆五十六年（一七九一年）に木版で出版された（百二十回本、程甲、程乙本）。本論は百二十回本についてみた。この『紅楼夢』は中国の国民的文学といってよいほど人々に広く支持されている。我が国のそれは『源氏物語』だろうが、これはすでに我々は原文のままでは読みかつ理解はできないが、中国の人々は『紅楼夢』はそのまま読むことが可能である。その熱き憶いはついに「紅楼学」（紅学）という研究をうみ、その研究専門団体も存在しているほどである。つまり、フィクションとノンフィクションとの境いがぼやけ、その情況が実在に近いものとさえ考えられている。現在、実際に北京市に『紅楼夢』の舞台となっている「大観園」が公園となって多くの市民の憩いの場所となっている。その中には『紅楼夢』にでてくる多くの建造物が当時の風景をリアルに知らせてくれている。

さて、この一大小説はまさに夢と現実が交錯し、そのプロローグは天上世界から筆をおこし、そこの花を愛した童子は地上におり、大貴族の賈家に生まれる。本篇主人公の賈宝玉である。この際女媧氏の石が化して彼の口中に含まれる（本書をまた『石頭記』ともいう）、彼が天上で殊に愛した絳珠草は彼をしたって楊州の林家に生まれた林黛玉となる。その他多くの仙女たちも地上にくだり、その主要な十二人は「金陵十二釵」といわれ、彼女らの侍女は「副十二釵」」さらに「又副十二釵」などといわれる。これらはすべて都の賈家（東の寧、西の榮国邸）を中

心として華やかな貴族生活を演出している。宝玉をとりまく女性のうち、同じく親族すじの薛宝釵は黛玉とは互に性格的にも相反したライバルである。

この物語りに登場する人物は実に七〇〇人以上におよぶとされ、絢爛豪華な物語りを支えている。しかし回を追うに従い、両賈家も次第に没落を迎え、落日の如きその輝きをうたった一大叙事詩でもある。

そのエピローグは、朝廷での試験に合格した宝玉はそのまま杳として行方不明となる（実際には天上にもどる）。

このように、天上と地上のことが因果関係の線上にあり、まさにこの世の出来事は夢（紅楼夢）なのである。この第五回に「仮の真となるとき真もまた仮」とあるが、賈宝玉の賈は音では「仮」、甄士隠（賈家と対する江南の素封家の主。最終回で道士の姿となり、懐古にふける）の甄とは「真」でもある。

季節のうつり変りの民俗・風習、家での催し、いろいろな遊び、祭祀の有様、多種多用な人間関係の色どりは、物語りの進行のうちに一人また一人とこの世を去ったり、この大邸宅から涙をのんで去っていき、あの雄大華麗を誇った大観園も次第に荒廃していく。

以上のような背景のうちから、本総会では中医学と関係する診察の情況、医薬関係、道教的な関係部分などの概略を報告したい。ある文献によれば「八十回本」についてみても、大略な統計ではあるが、五十回近く何等かの側面・内容をもった医薬的部分があるという。

登場する医師も王太医のような六位の位を持つ御医もいるし、胡大夫のようないいかげんなのもいたり、王道士のように道士でもあったり医業をして結構はやっているものもいる。尼僧の妙玉は大観園の中で庵をむすび、座禅もしているが扶乩をしている。馬道婆は『金瓶梅』にもでてきたいわゆる三姑六婆であるが巫婆跳神としるされている。葬儀には全真教道士が多く集まり、張道士や毛半仙のような悪魔払いが得意のものもいる。寧国邸の賈敬は深く道教を信奉し、導引・守庚申などもするが、煉丹術にこり、ついにこの為に命をおとすに到っている。

このように厖大な内容をふくんではいるが、このノンフィクションの世界は当時の有様をよく反映しているといってよいであろう。

（順天堂大学産婦人科）